

・カラー  
・右頁の  
上半分に、  
限度一杯  
大きく  
はみ出して  
掲載。



大正「三十六歌仙繪」  
佐竹本は  
鎌倉初期と  
いう。

※以下の古代の  
肖像画は、  
著作権者と  
思いますが、  
どうなのでは  
あ？

てきよはらのもとすけ

1409

第537図 清原元輔 (佐竹本三十六歌仙繪)

1309

『日本繪巻物全集』三十六歌仙繪 角川書店 昭和42年12月30日発行 30頁参照 73P

(双方共に、半島を形造っている)

■宇土半島基部の有明海側、宇土郡網津村大字笠岩には

『住吉神社』があって、撰津の『住吉神社』に相当す

る。

なお、先に述べた龍田山と同様に、宇土半島基部北岸の

『住吉神社』も、(聖徳太子以後)その名を留めることは許

されなかつたように思われる。

しかし、平安時代中期頃になつてもまだ、

《宇土半島基部北岸に、その昔『住吉神社』があつた》

ということが密かに伝承されていたのであろう。

そして過ぎし日の大倭国(肥後国)の繁栄を偲ぶ者達は、

かつての住吉神社の跡地に、『住吉神社』を再建したいと

願つたのではあるまいか。

宇土半島基部北岸の住吉神社の社伝によると、

「後三條天皇御宇(一〇六八―一〇七二)、国司菊池則隆、

撰津住吉神を勧請せしに創まる」

という。(日本社寺大観「神社篇、名著刊行会、五八六頁)

後三條天皇の延久二年(一〇七〇)に肥後国へ下向して

きた国司菊池則隆(一説に、藤原道隆の四代の後裔という)

は、…住古の都の地を訪れた後、宇土半島の方へと足を

伸したことがあつたに相異なる。(菊池氏三代「杉本尚雄

吉川弘文館、一―五頁参照)

その時、菊池則隆は、感慨深くも昔日の『住吉』に想ひ

を馳せ、

《歴史上や地形上からいって極めて縁の深い撰津国(大阪)

の住吉神を、――肥後国宇土半島基部北岸の住吉神社の故

地に勧請したい》

と考え到つたのだらう、と推察される。

試みに、この物語では、住吉神社の経緯について次のよ

うに考えてみたい。

●筑前国筑紫郡住吉村(いま、福岡市)には、古の橋之小門

址と称される所があり、この那珂川のほとりに、…神功

皇后征韓の時威靈を示された住吉神を祀る『住吉神社』が

あつて、この住吉神社こそ撰津住吉神社の根本であるとい

う。(帝國地名辞典「太田為三郎、名著出版〈住吉〉橋之小

門址〉参照)

●筑前国の住吉神は、穴門の山田(長門国豊浦郡住吉)、撰

津国武庫郡(兵庫県)、撰津国墨江之津(大阪)、肥後国宇

土郡、等々各地へ勧請されたのではなからうか。

●とはいへ、聖徳太子への『金人の夢告』以後、肥後国の

住吉神社は廃されたのであろう。

●しかし、平安中期の後三條天皇の延久二年(一〇七〇)

5,416<sup>P</sup>

直後の頃、宇土半島の地形によく似た和泉山脈の基部北岸にある摂津（大阪）の『住吉神社』から、……宇土半島基部北岸のかつての『住吉神社』の地へと、再び住吉神が勧請されたのかも知れない。

なるほど定かでないが、この物語においてはこう解釈したい。

■天草の『上島』は、『淡路島』に相当する。

なお、天草の上島に『栖本町』があり、淡路島に『洲本市』がある。

あるいは、『淡路島』という島の名は、本来、『阿波国への路次（みちすがら）にある島』という意味だったのかも知れない。

■天草の『下島』は、『四国全域』（もしくは阿波国、現在の徳島県）に相当する。

尚、往古には、四国の総称として『阿波国』とも「伊予之三名の島」とも呼んだようである。（『古事記』新潮社、三〇頁、注四参照）

※ 応神天皇は、『アハ路島』と『アハの国』とが二並らびしている。

● 「小豆島」と「吉備）児島」とが二並らびしている。

● として、『記紀の国生み条に記載されている』その他の

小さな島々も、皆、二並らびしている、

とお考えになったのではなからうか。（『記紀の国生み条。応神紀二十二年四月条参照。第四十六章〈兄媛〉の項において詳述）

■ 地形的にみて、菊池川は淀川に、筑後川は加古川に相当する。

ただし、見方を変えて、筑後川を淀川に見立てることも可能であらう。

■ 熊本県北部の小袋山は、六甲山に相当する。

■ 『御木国』（筑後国風土記逸文、今の三池）は、『三木』に相当する。

■ 九州の北の海岸は、近畿の北の海岸に、なんとなく似ている。

■ 博多湾の形（その昔、博多湾の西端はもつと入江が深く、唐津湾に通じていたという）は、琵琶湖の形に良く似ているといえよう。

なお、博多湾南岸にあつて繁栄した『（娜）大津』は、琵琶湖南端の『大津』と対比して考えられたのであらう。

特に、斉明・天智・天武紀を執筆するにあたって、この二ヶ所の『大津』が、重要な役割を果たしたように推察される。（新・やまと物語』の本文中において詳述）

5,417 P

●肥〔前〕国は、――〔備前国・備中国・備後国を併せた〕

●備国に相当する。

双方共に、「ヒノ国」であるといえよう。「備」は、漢

音で「ヒ」、呉音で「ビ」と訓む。〔大字典〕上田万年、講

談社〔備〕参照〕

尚、『日本靈異記』第十九の冒頭では、肥後国八代郡豊

服郷のことを、備後国八代郡豊服郷と誤って記述している。

●九州の東海岸（リアス式海岸）は、近畿の東海岸（リア

ス式海岸）と似ている。

●周防灘の形は、伊勢湾の形に似ている。

●南九州の山々は、近畿南半部の山々に相当する。

●阿蘇盆地を取り囲む外輪山は、伊賀盆地を取り囲む山々

（三輪山・多武峯・鈴鹿山脈・湖南の山々）に相当する。

■とすると、阿蘇の中岳は、伊賀盆地内のどの地に対比し

て考えられたのだろうか。

①『皇太神宮儀式帳』に、

《天照大神を奉じた倭姫命は、まず三輪から『伊賀穴穗宮』

（三重県名賀郡青山町阿保）へ到り、その後、北方の近江に

出て、美濃から伊勢へ向かわれた》

と記されている。〔日本書紀〕〔日本古典文学大系、岩波書

店、五九二頁、注九参照）

5,418P

②また壬申乱の記述においては、大海人皇子らが伊賀盆地

内に入ったところ、

《黒雲》があり、広さ十余丈もあって、天をよぎっていた》

という。

③そして、三重県名賀郡青山町阿保の小丘上には、『地震

の神』を祀る「大村神社」があって注目される。

もともと、この大村神社の創祀は、奈良時代後半の神護

景雲元年（七六七）というから、ずいぶん時代が下る。

〈阿保の小丘〉は、かなり古い時代から「阿蘇の中岳」

に見立てられていたとはいえ、――この小丘に大村神社が

創祀されたのは、神護景雲元年のことだったのであろう。

と想察される。

ともあれ、奈良時代ころまでは、

(1)三輪山〔西麓に『大神神社』がある。この物語では、三輪

山とも、神山とも記述する〕

(2)阿保の小丘

の二者が、阿蘇の中岳に相当すると考えられていたのだら

う、と解して述べてゆくことにしたい。〔口絵の第3図・第

4図参照）

\* 〃

つまり、倭国が、東の拘奴国（中国地方）や母国（もと

もとの出雲国、近畿地方)を併合してからというもの、……

これらの地に移り住んだ人々は、

《奈良盆地北端部こそ、(この当時はただただ広大な湿地帯であったとはいえ)——邪馬台国の合志原の都の地に比す

べき神聖なところである》

と考えて、この奈良盆地北端部を中心とする近畿一円に、

九州の地名と全く同じ名を、名付けていったのだらうと思

われる。

こうして、九州と近畿とに同一の地名が存在するように

なったとき、人々は、いよいよ、

《奈良盆地北端の地に壮麗な都を造りたい》

という、渴望にも似た思いをいだいたことであらうか。

履中紀四年十月条には、理由も記さず、

「石上溝を掘る」

とある。

もしかしたら、

《早くも履中朝(五世紀初頭)に石上の溝が掘られて、奈

良盆地北端部を埋め立てる工事が始められた》

ということなのかも知れない。

そしてその後、聖徳太子により、この大湿地帯を南北に

貫く上・中・下の三道が造られた。(天武紀元年七月条。

「聖徳太子」田村圓澄、中央公論社、四頁参照。既述)

この上・中・下の三道は、湿原埋立ての足掛りとする為

に造られたのであらう。(第七十五章《大和三道・新城(平

城京)築造の構想》の項において詳述。「朝日新聞」平成十三

年三月二十四日付《琵琶湖渡る石詰め道?古代の土木遺構出

土》参照)

またさらに斉明朝に、『石上溝』が南へ延長されたよう

に思われる。

「香具山の西から石上山に至る渠が穿られた」

というのである。(斉明紀二年是歳条参照)

石上山の石ばかりでなく、香具山あたりの石さえも、舟

(二百隻)で北の方へと運び、——大湿地帯に沈めて丘を

作ったり、宮(「新城。平城宮)の東の山に積み重ねて佐

保川の氾濫を防ぐ為の垣としたりしたのであらう。

あるいは、大和三山あたりにあった不要と思われる山

(第四の山)を削り取って、北へ運んだのかも知れないが、

……いうまでもなく定かではない。

渠を掘る人夫は三萬餘、垣を造る人夫は七萬餘であった

とい、斉明朝に掘られたその長大な溝は、『狂心の渠』

と呼ばれた。

「未だ成らざる時」

5.419<sup>p</sup>

↑

に、こういった非難の音があがったのだった。(斉明紀二

年は歳癸。本書七四頁に記載の「三つの失敗」参照)

それでは、この渠を作ることによって、一体《何が成

た》というのだろうか。

恐らく、そうした非難を押し切って、新城(平城宮およ

び平城京)の造営事業が進められていったのであろう。

そして、

《七一〇年、かつての邪馬台国の合志原の都よりはや小

さいながらも、――長年にわたってえいえいと築き上げて

きた待望の『平城』の新城へ、ついに遷都のはこびとなっ

た》

と推察される。(第1表、および口絵の第16図参照)

### 【佐保姫】(春を掌る女神)

■古来、肥後国の菊池川筋中深川村あたりの川を『佐保川』

と唱えている。(口絵の第12図参照)

また、深川村の氏神を『佐保川八幡宮』というが、この

『佐保川』の河辺に鎮祭されているからであらうという。

大字深川宇菊の池に鎮座する『佐保川八幡宮』の祭神は

応神天皇であり、菅公を合祀している。(『菊池郡史』名著

出版、二六五、六頁、三三〇頁。「熊本の地名」(井上辰雄、

熊本日日新聞社、三頁参照)

この物語では、

〈肥後国の合志の『古京』の東北方に位置する菊池川筋中

深川村あたりの川を、ずいぶん昔から『佐保川』と呼びな

らわしてきたのだらう〉

と解してみたい。

■一方、大和国の『平城宮』の東北の方向から平城京域内

へ入って南流する川も、『佐保川』と呼ばれている。

●なお往古には、平城京一帯は沼(渚地帯)だったように

ある。従って、『佐保川』は沼へ流入していた、と解される。

●また、『佐保姫』は春を掌る女神である。そして春夏秋

冬の四季を方角に配すと、春は東に当たるといふ。(『広辞苑』

〈佐保姫〉〈佐保山〉。「帝国地名辞典」太田爲三郎、名著出版

〈佐保〉〈佐保川〉〈佐保山〉参照)

●つまり、『佐保川』は平城宮の東(東北)に位置する川

である、と認識されていたことがうかがえる。

\*

清原元輔(九〇八、九一九)、平安中期の歌人で三十六歌仙

のひとり、清少納言の父)は、周防守・肥後守を歴任した

とい、『拾遺集』『後拾遺集』などの勅撰集に多くの歌が

収められ、家集に『元輔集』がある。(『人名事典』谷山茂

5,420

5,421<sup>P</sup>

むさし書房〈清原元輔〉参照

「歌人清原元輔は、この肥後国に居た時、次の和歌を作った」

と里俗に伝えられている。

さればこそ いざ清からめ

佐保川の 流れも清き 菊の池水

なお、《大字深川字菊の池あたりを流れる水》(菊池川支

流)のことを、——「菊池の水」という意見をも込めて、

『菊の池水』と詩的に詠んだものと思われる。

「流れも清き」というのだから、「池」の水を歌ったわけ

ではあるまい。

清原元輔は、古京の東北方の『佐保川』にたわむれ遊ぶ

春の女神『佐保姫』の姿をおもい描きながら、「さればこ

そ……」というこの歌を作ったことであつたらうか。

### 【龍田姫】(秋を掌る女神)

先に、肥後国の『龍田山』について、こう述べた。

「肥後国龍田の小丘は、もともと『龍田山』と呼ばれてい

たのであろう。

ところが後年、輝かしかった大倭国(肥後国)の都が、

記紀において《天上の国の都》に見たてられ、——その

AN

当然の成り行きとして、地理上実在する肥後国は倭(大

和)の都から遙かに遠い鄙の地と見做さざるを得なくなり、

また肥後国の『龍田山』は『黒髪山』へとその名が改めら

れたように想像される(二四八、九頁において既述)

さて、寛和二年(九八六)七十九歳の時に肥後守として

着任した清原元輔(九〇八、九九〇)は、さすがに往古の

ことや、さまざまな改変のことなどについてよく知ってい

たものと思われる。清原元輔は、『後撰和歌集』の撰にた

ずさわり、『万葉集』に古点を施したほどの知識人であつ

た。

「その昔、合志原の都の西南の山には秋を掌る龍田姫が配

されていたのに、——いまの肥後国には、あるべき筈の

『龍田山』と称される山が無い。寂しいことよ」

ここに、歌人・清原元輔は、遠く大和をしので、

『黒髪山』と呼ばれていた龍田の小丘を『龍田山』と改め

たのだらうと想像される。(熊本の上 今江正知、熊本日日

新聞社、九四頁参照)

ともあれ、このようにして再び、

●肥後国合志の古京の西南に、『龍田山』があり、

●大和国の平城京の西南にも、『龍田山』がある、

ということになったのであろう。

79

\*TKM

では、『佐保川』と『龍田山』とを併せて考えてみよう。

■大和国の春日山の山中、鸞瀧に源を發し、平城京の東北隅から京城内へ流入する『佐保川』は、古来有名であり、

—例えば、万卷一七九、三一四六〇等に見られるように、多々歌われている。

そして平城京の西南方の『龍田山』も、万葉集や伊勢物語（第三段）等に記載されているように、数多くの歌に

詠まれてきた。

■一方、歌人・肥後守清原元輔は、肥後国菊池川筋中深川

村あたりの川が『佐保川』と呼ばれつづけていることに驚きと興趣を覚え、「さればこそいざ清からめ佐保川の流れ

も清き菊の池水」と詠んだのであろう。

そしてまた、清原元輔は、肥後国白川北岸の黒髮山を、

『龍田山』と改名したのであった。

■こうしたことから推し測るとき、

「知識人であった歌人・清原元輔は、

《菊池川筋中深川あたりの『佐保川』と、白川北岸の秀麗な『龍田山』との間の合志原に、…かつて『都』が存

在した、という隠された事実》

を、かなり正確に知っていたのだろう。」

5.422<sup>p</sup>

を思えてくる。

つまり、清原元輔は、

〈神代以来、肥後国合志原の『都』の東北の川に春を掌る『佐保姫』が配され、—その『都』の西南の山に秋を掌

る『龍田姫』が配されてきた〉

ということを知っていたのであろう、と推察される。

### 【龍田彦】(風神)

それでは、秋の女神『龍田姫』が祀られている大和国の

「龍田」(松尾山を主峰とする山丘南麓の生駒郡龍田町龍田あ

たりから、信貴山南麓の生駒郡三郷村にかけての二帯)の地

に、風神『龍田彦』もまた祭られているという「いささか

奇妙な取り合わせ」については、どう解釈したらよいのだ

らうか。

□第八十七章 天武天皇(甲) 〈風神・大忌神〉〈風神の宮〉の

項において述べてように、

〈崇神朝 (もしくは継体朝) 以降長らく、肥後国の阿蘇

盆地への出入口にあたる「立野」に鎮祭されてきた風神

『龍田彦』を、…天武四年(六七五)四月十日、奈良盆

地への出入口にあたる大和国龍田の「立野」へ移したの

である。〉



と察せられる。「奈良県生駒郡三郷村大字立野の『立野社』

(別名、龍田神社)の社伝。および、天武紀四年四月十日祭

参照)

図)こうして、大和国の龍田に、秋の女神『龍田姫』と、風

神『龍田彦』とが、共に祀られるような結果になったのだ

らうと想像される。

■少しばかりややくしいが、以下、参考迄は述べておくこ

とにしよう。

●天武紀四年四月十日祭に

「風神を龍田の立野に祠らしむ」

とあり、これが日本書紀における『風神祭』の初見である。

●「龍田の立野」は、今の奈良県生駒郡三郷村立野のこと

であるという。(『日本書紀』(7)日本書紀(7)日本古典文学大系、岩波書店

四一九頁、注二参照)

つまり往古には、松尾山南麓の生駒郡龍田町龍田(法隆

寺近傍)ばかりでなく、——生駒郡三郷村あたりも含む広

大な地域を、「龍田」と称していたようである。(『帝國地

名辞書』太田為三郎、名著出版<龍田>。五万分の一地図。他

参照)

●もっとも、三郷村大字立野の『立野社』、別名『龍田神

社』(官幣大社)の祭神は『風神』とされているものの、……

5.423P

撰社に『龍田比古神社』・『龍田比賣神社』がある。(『日本

社寺大観』名著刊行会、三八九頁の<龍田神社>および三九五

頁の<龍田神社>参照)

●また、生駒郡龍田町龍田(松尾山南麓、法隆寺近傍)の

『龍田神社』(眞社)の祭神は『龍田比古神』・『龍田比女神』

であり、——もと『立野社』(官幣大社龍田神社)の撰社で

あったという。(『日本社寺大観』名著刊行会、三九五頁の<龍

田神社>参照)

■ともかく現在では、大和国の龍田に、

●『秋の女神』(龍田姫)

●『風神』(龍田彦)

の両神が同居しているかのように見受けられる。

■しかし、本来、

<肥後国において、『秋の女神』は白川下流の『龍田』の

地に、——一方『風神』は白川上流の『立野』の地に、各々

別々に祭られていたのである。>

と思われる。

船の中では、小野家の者達のはなやいだ歌談義が続いて

いた。

そんなにぎやかな声が聞えてはいたが、……しかし、小

龍田比賣神社

町の脳裡には届かなかった。

小町は、しきりに考えごとをしているふうであった。

その目からは、涙が溢れていた。

小町は、肥後国合志の横山の麓の祖父母の家で、母と一

緒に過ごしていた幼い日々を、次から次へと思

い起こしていた。

〈お母さま。……お母さまはお元気でいらっしゃいますか。

小町は、もつと涙山の事を覚えて、宮中へ上ります〉

しかし小町は、母のことを決して声に出しては言わな

かった。母の名を口にただけで、周りの者達を大いに困

惑させるのが分かっていただけだった。

母の面影を、必死の思いで胸の奥深くにしまい込んだ小

町は、

〈私が困った時には、いつも私の乳母が助けてくれたもの

だったわ。遠い田舎に残してきたあの優しい乳母は、今こ

ろどうしているかしら。会ってお話をしたいわ〉

と、考えを集中させた。

小町は、その淋しさに堪えず、歌をつくった。(小野小

町論「黒岩涙香、朝報社、一四(一五頁参照)

よそにこそ峰の白雲と思ひしに

ふたりが中に早や立にけり

28

5,424 P

この歌の端し書きには、「めものとの速き所にあるを」と

記されている。(群書類従本「小町集」)

小町に乳母があつたということは、小町が大切に育てら

れていた一端を示している、といえよう。

肥後国の祖父・祖母・母らは、小町が都にのぼった時の

ことを考えて、小町に乳母をつけてやり、……そして又、

礼儀作法や習字や和歌等の基本的な素養をも身につけさせ

たのだらう、と想像される。

●因みに述べると、白雲は「立つ」にかかる枕詞とされて

おり、万巻六・九七一、万巻九・一七四七・一七四九に、

「白雲の龍田の山……」とある。

●また、さらに述べると、「よそにこそ峰の白雲と」とあ

るが、——「雲居の余所」とは、〈遠く離れた所〉のこと

である。(「広辞苑」〈雲居〉参照)

●泊瀬川下流の『龍田』あたりの岸辺で舟を降りた篁ら

族は、先に到着していた牛車に乗り替え……峡谷の底を西

流する大和川の川筋沿いに難波の方へと下っていったので

はなかるうか。

だがいままでもなく、そうした詳細についてはよく分か

らない。

\*

ともあれ、やがて、篁らは京の自宅へ帰り着いたように思われる。

ところが、この旅の無理がたたったのか、——篁は、またもや、病を得たのかも知れない。

嘉祥四年、つまり仁寿元年（八五二）春正月十一日に、篁は（自宅に居て）遥に近江守を授けられたのだった。

〔文徳実録〕仁寿二年十二月二十日条の篁伝。「古今和歌集

目録」。第九十五章《篁の病》の項参照）

なお、第九十五章《篁の病》の項において述べたように、

●嘉祥三年（八五〇）十月、「停大弁」「勸解由長官」

●仁寿元年（八五二）正月十一日、「遥授近江守」

●仁寿二年（八五二）春、「病瘳。復爲左大弁」

とあるのだから、——篁は、嘉祥三年（八五〇）十月に左大弁・勸解由長官を停めた時から以降、仁寿二年（八五二）春に病気がなおる迄の間、ずっと朝廷に出仕していなかったのだらう、と思われる。

### 花の衣

仁明天皇が嘉祥三年（八五〇）三月二十一日にお亡くなりになって、一年の月日が流れ、御喪があげた。

諒闇（天子が父母の喪に服する期間）は一年と定められ、

国民も服喪していたのだが、——この日、仁寿元年（八五二）三月二十一日に、その期間が終った。

喪服を脱ぐためには、まず河原に出て裸ぎをしなければならぬ。

そんな時、一風変わった童が文を持ってきた。

手にとって、見てみると、

みな人は花の衣になりぬなり

苔の袂よかわきだにせよ

【大意】世間の人は皆喪服をぬいで花やかな装いに変わったという。出家の身となった私は、あの時以来、悲しみの色をした黒装束のまま暮らしている。日夜涙に濡れている僧衣の袂よ、乾くだけでも乾いておくれ。

と書かれていた。（以下、「大和物語」一六八段。「古今集」巻

十六一八四七。「遍昭集」参照）

それは、明らかに良岑宗貞の筆蹟であった。

宗貞が法師になったということはその歌によって分かったが、しかし、どこに居るのかは見当もつかなかった。

五條の後（仁明天皇皇后順子、藤原良房の妹）は、宮より内舎人を遣わし、寺々をあちこちたずねさせ給うて、宗貞の消息をお求めになった。（「小野小町歌」小林茂美、桜楓社、

三一九頁。「皇室大百科」朝日通信社、二二〇～二頁仁明天

5.425p

皇》〈文徳天皇〉。「国書人名辞典」岩波書店〈藤原良房〉(参照)「ここにあり」(恐らく、石上寺におられますよ)といった

意味なのである)と聞いて訪れたが、又失せてしまった。

とはいえ、遍昭が隠れている所に思いもかけず行き着いた。そこは、……後文から察すると、どこかの山の奥だった

ようである) 遍昭はもはや隠れることも出来ず、内舎人に会った。宮中で顔見知りだったその『内舎人』(平安時代には天皇

の雑役や警護に当った低い家柄の宣)は、「五条の後の宮より、御使にまいりました」

と言い、仁明天皇皇后のおおせごとを次のように語った。「このように帝もお亡くなりになり、今では、生前親しく

目をかけておられた人を、その形見と思つて見ていたいのに、宗貞が世に失せ隠れているのは、大変悲しいこと

です。宗貞の元の自宅の方でも、音沙汰もないとかで、ほんとうにあわれな様子で泣き悲しんでおられるそうです。

云々」 遍昭は、仁明天皇皇后のそんなにも優しい御心の内を聞くと、うち泣きことう言つた。

「おそれ多い御恩寵に長年馴れさせていただき、仁明帝

の御在世でない世の中には、ほんの暫くも生きて行けそ

うな心地がせず、このような『山の末』(山椒は山頂のこと、

齊明紀二年是感桑参照。もつとも、『山』(特に延暦寺の称)の

末寺の意味かも知れない)にこもり、死ぬ時は山籠りの終

る時と思つているのですが、不思議なことに、こうして

まだ生きながらえておられます」

そして、遍昭はこう歌つた。

かぎりなき雲居のよそに別るとも

人を心におくらさむやは

〔大意〕身ははるか遠い雲のかたに別れ別れになるとし

ても、恋しい人のことを置き忘れる(後らす)どころか、

いつも私の心の中に抱いているのです。(大和物語)一六

八段。「古今集」巻第八一三六七。「遍昭集」。「広辞苑」(後ら

す・遅らす)参照) この大徳(僧侶のこと。つまり遍昭)の顔容貌姿を見る

に、あの良岑宗貞と同じ人とも思えぬほど、影のように瘦

せ衰えて、ただ蓑のみ着ているのだった。少将であった

頃の清朗な様子を思い出すと、涙もどどまらなかつた。

しかし悲しども、そこは片時として人の居るべくもあら

ぬ山の奥だったので、泣く泣く、

「さらば」

5.426<sup>P</sup>

125  
126  
127

5,427<sup>P</sup>

と云って、のち后の宮のつかの使は帰っていった。

大徳だいたく(僧侶)を尋ね出したことの次第を申し上げると、  
后のちの宮(仁明天皇皇后)はたいそうお泣きになった。近侍きんじ  
の者達も激しく泣いて哀れがった。

ここに、后のちの宮がお命じになり、再度使者をお遣わしに  
なつたところ、……どうしたというのだろうか。遍昭は、  
ありし所からまた失せてしまっていた。「犬和物語」一六

八段参照)

### 祖父篁の死

仁寿元年(八五二)の年頭に、小町らを伴って奈良盆地  
東北部の先祖ゆかりの地を訪れ、そして『石上寺』に詣で  
た頃からまた、篁は体調を崩していたとはいえ、……やが  
て、嬉しいことに、身体中に力が湧いてきたように思える  
までになった。

年が改まって、仁寿二年(八五三)春となった時、

「病が癒えた」

と喜んで篁は、朝廷に参内した。

元気になった篁は、以前の通り、左大弁に復帰した。

ところが、病魔は、その後また篁を襲った。

85

篁は朝廷に出仕せず、家において病床の日々を過ごした。

文徳天皇は、篁の病状をあわれみ給い、しばしば使者を  
遣わされ、また錢穀を賜わって慰問された。

そして同年の十二月十九日、家に就いて(おもわいて)、  
従三位をお授けになった。

病篤きに及んで、篁は諸子を集め、

「死と同時に棺に入れて安置し、かりもがりせよ。また、

人に知らせるな」

と遺言した。

仁寿二年(八五二)十二月二十二日に、参議左大弁従三

位小野朝臣篁は薨じた。(『文徳実録』「古今和歌集目錄」参

照)

この時、篁は五十一歳だった。

小町は、十二歳であったろうか。

それにしても、篁の遺言について少しばかり気にかかる。

『文徳実録』仁寿二年(八五二)十二月二十二日条の篁伝

には、

「及およびおと困篤こんあつ、命めいシテし諸子しよし一い日ひヲを。氣絶きそつ則すなは殞れん(かりもがり)。  
莫な令ら人知に知らしむなかれ」

とある。

852 12  
841 11

清貧に生きた篁は、華美な葬儀を好まず、

《自分の死を、人に知らせるな》

と遺言したのであるか。

そうかも知れない。

しかし、仁明帝以来引き続いて信頼厚く、親友に施して

信望もあつたと思われる参議左大弁三位小野朝臣篁が薨

じたことを、どうして隠しておせようか。

「葬儀を質素にせよ」と言つたというのなら理解し易いが、

——「自分が死んだことを人に知らせるな」と言つたとは

考えにくい。

\*

この物語では、全く別の意味に解してみたい。

篁は、《小町の将来》が心配でならなかつたのではない

だろうか。

可愛くてしかたのない小町の《あの出生の秘密》が公に

とりざたされることを、篁はなににもまして恐れたように

思われる。

「人に決して知られないようにせよ。知らせるなよ。くれ

ぐれも気を配ってほしい」

篁は、参集した諸子（上の者が下の者に対してよぶよび方）

に命じて、こう言つたのであらう。

5,428P

もしも、

「良実が承和六年（八三九）肥後国合志原へ流され、……

そして、小町が承和八年（八四二）春に天上の国の古京の

地で生まれた」

（内情が）

などといったことまかに世間に漏れたならば、

どうなるか。

そのような、国家の機密ともいふべき事柄を内包した事

実が、口さがない人々の間に広く知られ、陰で誇張され、

吹聴されるようなことにならば、——恐らく、

小町にだけでなく、小野家にも、決して良い結果をもたら

しはすまい。

篁は、小町の抜きん出た才能と、たぐいまれな異彩ぶり

に、かえつてその将来を憂え、

《小町の出生については、口外するな》

と厳命して死んだのだらう、と推察される。

\*

なお、

「文徳実録は、六国史の一。一〇巻。文徳天皇の事跡を漢

文で記述した実録。八七年藤原基経らが撰して中絶、菅

原是善らが加わつて八七九年に完結した」

という。（「広辞苑」《文徳実録》参照）

因みに述べて、『文徳実録』が完結した八七九年当時、

● 遍昭は、六十四歳

● 時康親王（五年後の八四年に即位されることになる光孝

天皇）は、四十九歳

● 小町は、三十九歳

だったようである。

小町が、楊貴妃に比して考えられるような幸せを擲むの

は、『文徳実録』完成後のことであろう。と思われる。（後

述）

『文徳実録』の編者は、遺言の真意や、そんな後のことな

ど知る由もなく、——小野篁の遺言を、その通りに書き綴つ

たものと思われる。

### 小野小町祖つまびらかならず

先に述べたように、『大系図』および群書類従巻第六十

三所収『小野氏系図』によれば、

「小野篁の一男出羽守良眞の二女が、小町である」

という。

● この説は、『大日本史』にも引かれ、

「小野小町、不詳一審、其所出本末。或曰、参議篁孫也。」

父曰、良眞出羽守。」

5.429

とある。

● また、『百人一首一夕話』（尾崎雅嘉）中にも、

「小野小町祖つまびらかならず、古説に参議篁の孫也とい

ひ、小野良實のむすめといひ、又常澄の女、常澄の女など

いふ説あれど、いづれもたしかならず」

四章（篁は、小町の祖父かどうかについて）の項において既述）

\*

しかしながら、小町と篁との関係について明確に述べな

い説も、以下に示すように実には多い。（一部重複）

(1) 出羽郡司の女とするもの

この説は、その父の名も明記せず唯「出羽郡司の女」と

あるばかりで、『古今和歌集目錄』・『拾芥抄』・『清輔本古

今集』・『顯昭古今集序註』・『和歌色葉集』・『古今榮雅抄』

等に見えるものである。又『徒然草文段抄』・『百人一首拾

穂抄』・『塵添壺囊鈔』も一説として、これをあげてゐる。

(2) 小野良實の女とするもの

小野良實女とあるのみで、小野良實が如何なる身分家系

の人であるかにはふれてゐない。『大系圖』によれば良眞

であるが、ここでは諸書とも良實に作る。この説に據れる

ものは、『本朝年代記』・『和漢三才圖會』・『勅撰作者部類』・

『百人一首佐禰閑都羅』(寫本)等である。

(イ) 出羽郡司小野良實女とするもの

『百人一首抄』(細川幽齋)・『百人一首抄』(寫本慶長興書)・

『百人一首御講釋聞書』(風早家舊藏本)・『和歌秘決』(一條

兼良)・『百人一首師說抄』(僧祐海)等には、

後成恩寺殿御説出羽郡司小野良實女と云々。三光院御説

當澄女と云々。又云常澄女と云々

とあり、『關秘縁』(未詳)には、

小町の事實歌學者流に種々の説ありて、一決し難し。必

竟右記の所見の分れしするゆゑとぞ。證據ごとく

掲げて初學日を費すの助にせんとて、詮す所、小町と云

ふ無雙の歌人出羽郡司小野良實が娘にて……

とあり、又、『扶桑故事要略』(僧盤察)にも、

小野小町は出羽郡司良實の女なり。仁明帝御宇擢られ出

羽の郡司となれり。先先祖は孝昭天皇の子天足彦國押人

命より出たり。世々近江滋賀郡小野の邑にをり。ゆゑ

に爲す氏……

とある。

(ニ) 大和守小野良實の猶子とするもの

『揚鳴曉筆抄』(寫本・靜嘉堂文庫藏)は、

彼良實大和守になりて上落し侍る時近江國玉造庄にて獨

88

の小女に行逢り、則猶子とせり、小町といふこれなり

と述べて居る。

(ホ) 小野良實の孫とするもの

『百人一首抄』(架藏寫本)によれば一説に「出羽郡司小

野良實子右京亮良家之女」とあり、又『謠鈔』に「小野山

本六代孫中納言良實子出羽郡司右京亮良家之女」とある。

又『歌仙二葉抄』(延亨四年刊平春幸)には「桓武天皇ノ彦

中納言良實が孫、出羽郡司小野良家が二女也」とある。

(ニ) 出羽郡司良實の領地の女とするもの

『和歌極秘傳抄』(寫本)に見える一説である。

(イ) 小野宰相常詞の女とするもの

『三十六歌仙繪巻』(繪・傳信實筆、詞書・傳後京極攝政良

經書)に、

小野小町

小野宰相常詞女古今目錄曰

出羽國郡司女號比古姫云々仁明清和

兩代間於石上有贈遍照之哥

いる見えてうつるふものはよの中の

人のこころのはなにそありける

とある。

といえ結局確かな説として断定し得べきものはない、

とある。『歌は齋書類依本』「小町某」に掲載されてる。

5,430P



・右頁の上半分に、左右を限度一杯  
はみ出させて掲載下さい。

光孝天皇 5526<sup>p</sup>

5,431<sup>p</sup>

小野小町 164<sup>p</sup> - 2/3

アマゾン 151<sup>p</sup>



小野小町

小野宰相常詞女名今目錄曰

お羽田郡司女名古姫仁明清和

身代同人於石青贈遍照之乎

いかにてうけらふしれよのキ乃

人のこたれしはあはれもひま

130G

140G

第538回 小野小町 (佐竹本三十六歌仙繪) の詞書

ことばがき

かたがは

『日本繪巻物全集』三十六歌仙繪、角川源義、角川書店、昭和42年12月30日発行、27頁参照、89<sup>p</sup>

※下記の本文、図書館から借りて写真撮影して下さい。  
(右端の黒帯をなす物)

5432P

小野小町 164頁 - 3/3

・左頁の  
上半分に、  
隈度一杯  
大きくはみ  
出させて、  
掲載下さ  
い。

暗くならな  
いように、  
明るくお願  
いします。

鎌倉時代  
初期のもの  
というから、  
著作権の  
許諾は  
不要と思  
いますが、  
どうか  
なすれば



右頁が邪魔になり、  
コピーの際に出来た黒帯  
です。

324  
13QG 14QG 324

第539図 小野小町 (佐々木本三十六歌仙繪)

5430P 129P 文庫の場合と  
合わせる。

\*右端の黒い  
織帯を、他の  
ところと同様の  
色にしたい。

『古今和歌集』日本古典文学全集、小学館、昭和62年12月20日、第20版発行、口絵参照

※左の本文を撮影して下さい。

といわれている。「小野小町」前田善子、三雀堂、一四五

一五〇頁参照)

小野小町が歌才にすぐれ、また絶世の美女だったので、

人々はその素姓《本当の素姓》を知りたがったに違いない。

そこで、小町の出自に妥当性を見い出そうとして、次か

ら次へと数多くの説が生じ、……いよいよますます、小町

の来歴などのことが、朦朧としたものになっていったの

であろう。

ともあれ、平安初期の歌人であるというのに、小野小町

の出生についてこんなにも多種多様な説があるところを見

ると、——当初から混乱していたように思われる。

篁や良実をはじめとする周辺の者達全てが、堅く口を閉

ざし、——そして小町自身も決して真相を語らうとしなかつ

たその結果なのであろう。

\*

さらに、小野家につらなる者達ばかりでなく、時の朝廷

も又、

〈小野小町が、古京(すなわち天上の国の都の地)で生まれ

た〉

ということを隠したがったのだらう。

そんな口が、人々の口にのぼって広く知られるように

秋家

5433<sup>p</sup>

なったら、……今までの多くの苦勞が水泡に帰すかも知れ

ないのである。

そうしたわけで、

●小町の出生・生い立ち等については、曖昧糲糊としたもの

のとされ、

●小町の父母についても、あえて、うやむやにされた、

と推察される。

■なお、肥後国合志の七国神社の由緒書きには、第九十四

章〈七国神社〉の項において述べたように、

「小野篁朝臣の子良実卿」

と記されており、——小野良実の最高位は、『卿』(参議も

しくは三位以上)であつたらう、と解される。「広辞苑」

〈卿〉(参照)

つまり、父篁が参議左大弁従三位であつたように、……

子良実もまたほぼ同様の地位にまで昇進したことがうかが

える。

だが、そうしたことは、公の文書には一切しるされてい

ない。

平安時代、中・後期頃の朝廷は、故あって、そのような

記録の全てを書籍等から削除したのであろう。

■また、ほんの参考迄に述べてみたいことがある。

水原エチカ

840  
840  
44  
45才  
宝暦6年上  
宝暦802年生まれ  
宝暦6年  
840年  
840年

「小野小町は、小野宰相常詞の女である」

とする説がある。(既述)「佐竹本三十六歌仙繪」参照

この説に関して、こう言われている。

「宰相とあるからには参議を意味するが、小野氏の一族中宰相で常詞といふ名の人は見当らない。因みに、関谷眞司禰氏は小野を居處と見なし、常詞を常嗣の誤字として藤原常嗣(小野篁と船を奪いあつた遣唐大使)の女と推定している

という。「小野小町」前田善子、三省堂、一五〇頁参照)

付言すると、『続日本後紀』仁明天皇の承和七年(八四〇)四月二十三日条に、

「参議左大弁従三位藤原朝臣常嗣薨。…薨時年卅五」

とある。

しかし、もしかしたら、

〈小野宰相常詞は、小野良実卿の別称だったのではなかるうか〉

とも思われるが、…なるほど詳らかでない。

### 小町、宮中にのぼる

いつのことだったのかはつきりしないが、小野小町は宮中にのぼった。

5,434

察するところ、小野家で厳しい教育を受けて恥しくない素養を身につけた小町の起居振舞はずで十分あてや

かであり、言葉遣いも京風に雅やかに磨きがかけられていたに違いない。

①あるいは、生前の篁の働きかけがあったので、篁が亡くなったとはいえ、…小町は九重の内へ上ることになったのだろうか。

②あえていえば、…小町が宮中の人となつたのは、篁が亡くなった翌年の仁寿三年(八五三)十二月二十二日に一周忌の法事を済ませた直後のことだったのかも知れない、などと想像される。

\*

ところで、小野小町の身分については、次のような説がある。

(1)中麿女房説

参議篁に由縁があり、出羽守の女とある一説から、小町を中流貴族の子女と見なし、小町の身分を従来の采女説より一段引上げて考えた説。

(2)采女説

「郡司の女」「和歌の才あり、容貌美麗」等の記述から、直ちに采女が連想されて成立したものと思われるが、鎌倉中

26

二〇才  
169頁  
同

室町時代には見えず、江戸時代に至って、諸家のおおむね従う所となったという。

しかし、采女は、貴官ではないとされる。

また、采女奉仕の年齢は、卅以下十三以上とも、卅以下卅以上ともいう。(小野小町「前田善子、三省堂、一五五)

一六二頁参照

もともと、追って述べるように、当代の錚錚たる身分の男たちに対して微塵たりとも臆すことなく振舞い、高貴な香りのする歌を詠み、時には機智にあふれた婉曲な表現ながら、もずばり本心を言っている歌を作ったり、「おろかなる云々」と歌って叱責しているところ等から推察すると、小町は決して微官ではなかったろう、と思われる。

おろおろしたり、卑下したりする様子が全く見られないのである。

小町と遍昭の贈答歌 (清水寺)

宮中にのぼった小町は、まだまだ幼く、あどけない少女ではあったが、…天生の麗質とでもいうのだろうか、早くも才色ただならぬものを示していた。小町は、ひときわ美しく、しかも歌をたくみに詠むのだ。

5,435 P

93

さて、それは、文徳天皇の斉衡元年(八五四)正月

であったかも知れない。

ときに、小町は十四歳、遍昭は三十九歳だったことだ。

後宮の女達は、宮中にあがったばかりの小町を連れて

平安宮からさして遠くない『清水寺』に詣でた。

この当時の後宮の女房たちは、京都・奈良の市中の寺ばかりでなく、大和国の長谷寺とか、近江国の石山寺とか、

平安京北方の鞍馬寺などにもよくもうで参籠した。

参籠しようと思つた者は、まずあらかじめ、法師に頼んで『厨』を予約した。

すなわち、仏前にビョウを立って区切り、そこに香やシキミ(葉に抹香臭を有する常緑樹)、たらい、手水などを用意させておく。そうした区画が、仏前にいくつか出来る。

その一つ一つが『厨』というものである。

仏堂にあり、指定された局に入った女房たちは、願いごとをひそかに書きとどめた願文(証書)を奉り、夜もすがら礼拝、読経をつづける。

参籠中、仏前でウトウトしているあいだに夢をみる。そ

854.14  
841.13  
854.39  
816  
38.38  
清水の舞台  
御前  
御座  
参籠

小野小町 167<sup>2</sup>-210 5,436<sup>7</sup>



・カラー  
・左頁の上半分、  
はみ出して  
大きく掲載  
下さい。

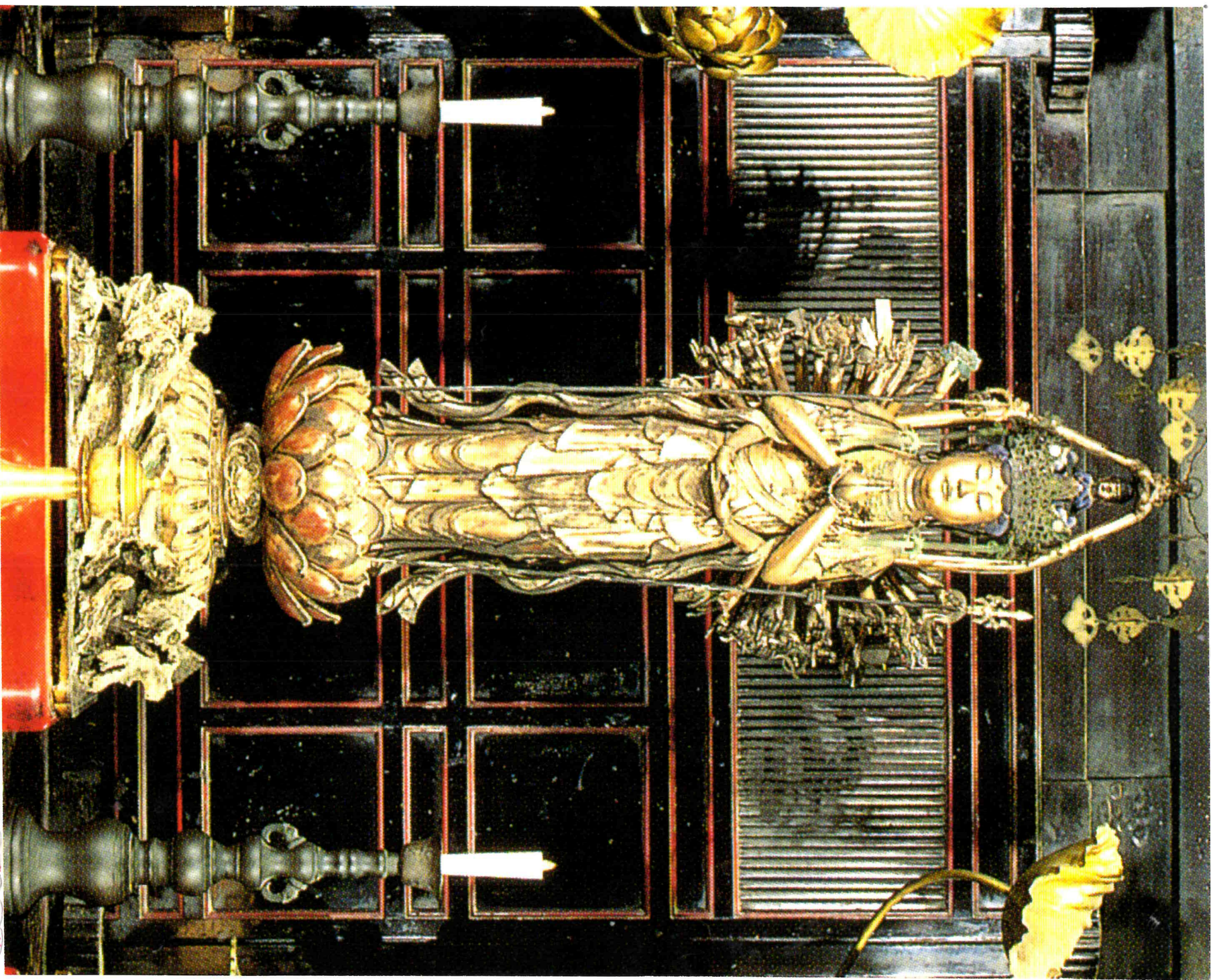
1409 写真図版 797 <sup>きよみずでらほんどう</sup> 清水寺の本堂と舞台 (国宝) ← <sup>清水寺歴</sup> 117頁。

1309

『清水寺の色』 清水寺 1989年8月30日発行 38頁参照 94<sup>p</sup>

カウー  
右真鍮に限及一  
本出(7掲載下三)

暗くならないようにして下さい。  
(明子にお願いします)



5.437<sup>p</sup>

1306

御本尊御開帳 音羽山 清持 御本尊御開帳 平成2年3月3日 口絵参照  
普段は厨子の前に 秋本尊像と母様同様の姿の やや小さい御前立が如置されてる

1406

空真図版 798

御本尊厨子前の

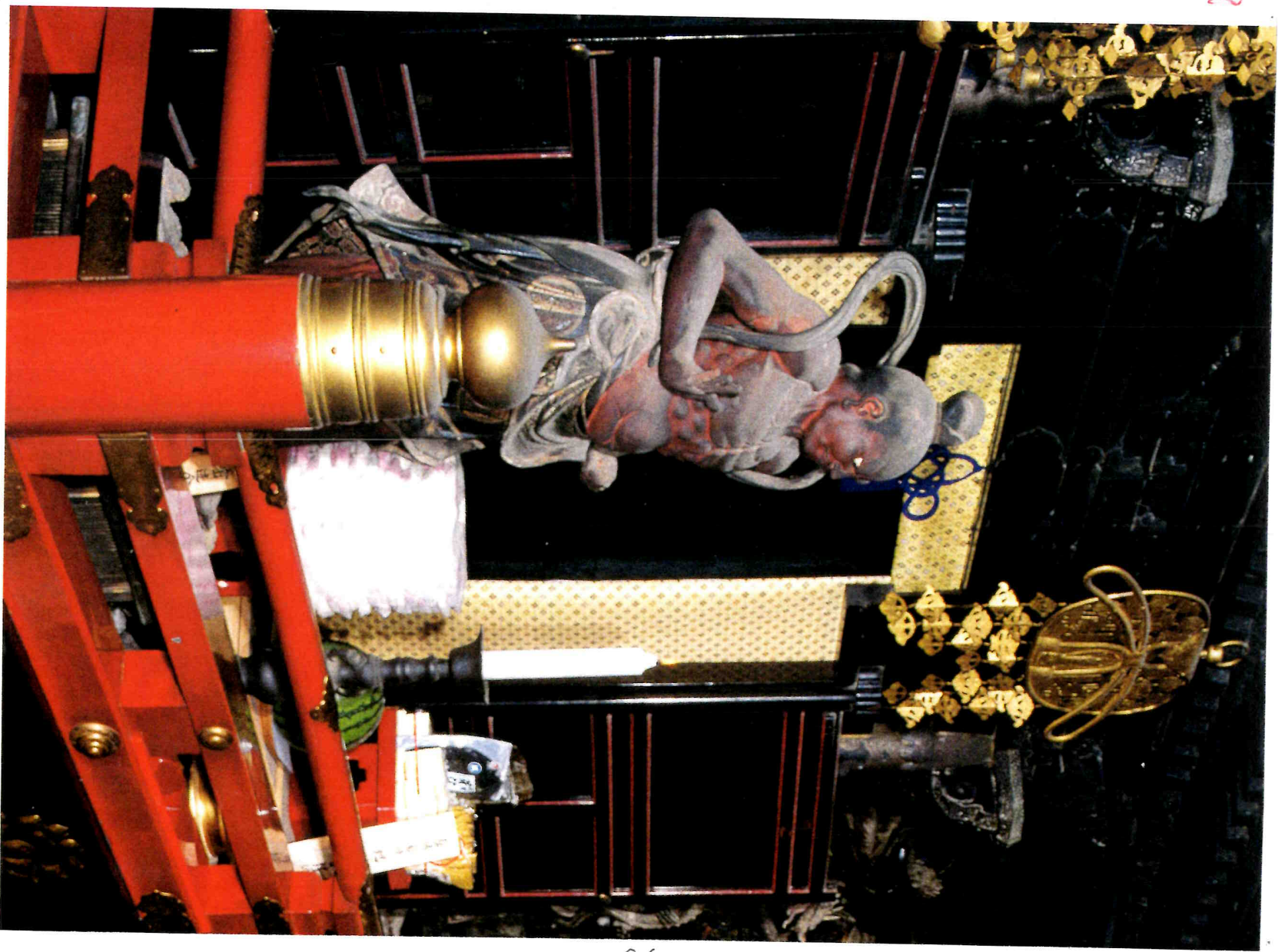
御前立

(十一面千観音菩薩立像)

カラ一  
 左頁全面に、隈取柵  
 (明るくお願ひします)

はみ出したり  
 大木掘敷  
 下さい。

5,438P



奥付紙

1409

写真図版 799 清水寺本堂 本尊御開帳

ニあはせ

1309  
 御本尊御開帳記念  
 御本尊、十面千手観音菩薩を  
 三十三年に一度  
 御開帳によつて  
 拝観することかぞえる

清水寺展  
 平成25年御開帳後に発行  
 87頁参照



れこそ、仏のお告げだと感激し、いよいよ信心

を強めるのだった。

とはいえ、仏前の局内で徹夜してしまつとか、そこで寝こんでしまつという事はなかった。泊まる場所は、別に僧坊のうちに用意されていた。(日本の歴史③平安

貴族、読売新聞社、一六六(七頁参照)

宮中の女房たちは、牛車を降りると急な清水坂を登って

ゆき、清水寺の内の指定の局へと案内された。

『大和物語』第一六八段中に記されている「小町の清水詣」の部分、すでに先述した通りである。「第九十五

章「小町と遍昭の贈答歌(石上寺)」の項において既述

その時の様子について、ここに想像を交えながら、いま一度見てみることにしよう。

小野小町は、正月に清水寺に詣でた。行い(仏道をおさめること)などして、耳に入ってくる声を何気無く聞いて

いたが、...やがて、はつとした。

姿は見えないものの、その声は確かにどこかで聞いたよ

うな気がしたからだった。

さらにじつと耳を澄ませると、あやしく尊き法師の読経

の声だということが分かった。

5,439P

(65頁下末549〜) ④ 5,408P下末249〜

その僧は、陀羅尼をよんでいた。

なお、『陀羅尼』は梵語の長文で原語のままとなえるも

のであり、種々の功德があるとされた。——嘉祥三年(八

五〇)三月二十八日に出家した遍昭は、四年後にはもう陀

羅尼を読むまでになっていたのである。

「石上寺でお会いして、お話などしたあのお坊様かしら。

お声がとてもよく似ているようにだけ、そんなこと信じら

れないわ。違つてお坊様よ、きつと」

小野小町は、自分自身に言い聞かせようと務めてみたが、

...しかしやはり、気になつてしかたがなかった。

小野小町はあやしがり、つれなき様にて(何気ないふり

をして)人を遣りて、見てこさせた。

なお、

「小野の小町あやしがりて、つれなき様にて人を遣りて見

せければ、云々」

とあるところから察すると、——宮中に上つた小町は、年

若くわずか十四歳ですでに、

へ人に傳かれるほどの待遇を受けていた

ように思われる。

見てきたその女は、

「蓑一つを着た法師が、腰に火打筒(火打石やほくちを入

854年正月 854年正月 清水 5435下末 856-4

854年1月13日 854年1月13日

れる小箱)など結びつけて、隅の方にいらっしやいました」  
と言った。

それだけ聞いただけでは、はたしてその声の主があの石  
上寺の法師なのか、そうでないのか、分かる筈もなかつ  
た。

かくてなご聞くに、声はいよいよ尊くめでたくきこえて  
きて、ただなる人では決してあるまいと思われた。

「もしかしたら、……いいえきつと、良少将(遍昭)様だ  
わ」

小町は、いまはもう、ほぼ確信していた。  
この時、——少女小町の目は、いたずらっぽくキラキラ  
輝いていた。

「あなた方、どういふ返事をなさるかしら。私のことを覚え  
ていらっしやったら嬉しいんだけど」

ここに小町は、石上寺で遍昭に書き贈ったあの歌を、さ  
らさらとしたためた。

「私はいま、この清水寺に来ております。大変寒うござい  
ますので、御衣一つお貸し下さい」とて、

いはのうへに旅寝をすればいと寒し  
昔の衣をわれにかさなむ

と書いた。

石上寺 石の上に残置かれた衣  
5,405<sup>上</sup>

石上寺  
5446

5,440<sup>P</sup>

小町を連れてこの清水寺へやってきた女達は、その歌を  
見て、大いに興味を引かれた。

「まあ、この歌は少し大胆すぎるんじゃないかしら」  
「でも面白い歌よ。私はこの歌の返事を見たいわ」  
歌を持っていった女が、やがて養一つを着ている法師か  
ら返歌をもらって帰ってきた。

小町は、その歌を見て喜んだ。そこにはこう書かれてい  
た。

よをそむく昔の衣はただ一重  
かさねばつらしぎ二人ねむ  
「あややはり確かに、少将良岑貞様なのだわ。私のこと  
も、あのとき贈った歌のこと、返歌のことなども、はっ  
きり覚えて下さっているのね」

石上寺で楽しい時を過ごした三年前の情景が、小町の心  
の内に鮮やかに思い浮かんでいた。

「あなたにも親しく言葉を交わした間柄なので、少  
将良岑様にお会いして、お話などしたいわ」

こう思って、小町はその人の姿を探したが、どうしたと  
いうのだろうか。遍昭は、かい消つように失せてしまつて

いた。

遍昭にとつて、いま小町と会つて話をするのはくら

い> ことだったのであらう、と想察される。

ところが一方、さあ大變、清水寺の法師からの返歌を見た女房達は驚いた。

小町から、

いはのうへに旅寝をすればいと寒し  
昔の衣をわれにかさなむ

という歌をもらった法師が、……こともあらうに、

よをそむく昔の衣はただ一重

かさねばつらしいぎ二人ねむ

と歌ったのである。

これまでの二人の仲がどんなものだったのかは知る由もないが、ともあれこの返歌はあまりにも常軌を逸している

ように思われた。

そして後年、小町と遍昭とのこの贈答譚を聞いた都人達は、おもしろおかしく嘸し立て、……やがて、「物いひ心

みむ」と積極的に歌いかける小町を、すっかり「色好みなる女」(「伊勢物語」第二五段)像に仕立て上げてしまった

ように想到される。「小野小町歌」小林茂美、桜楓社、三

五(六頁参照)

5,441<sup>P</sup>

### 小町と遍昭の贈答歌 (長谷寺)

あるいはそれは、翌年の斉衡二年(八五五)『初夏』(陰

曆四月)のことだったかも知れない。

この時、小町は十五歳、遍昭は四十歳であつたらうと思

われる。

小町らは、この折りには少し遠出して、大和国の『長谷

寺』に詣でた。  
**第40回** **宇真図** **800** **801** **参照**

なお、大和国の長谷寺および山城国の清水寺はともに、

十一面観音像を本尊とする勅願の名刹であり、また、平安

時代以降の観音信仰の流布浸透とともに貴賤を問わず尊信

をあつめた霊場、という共通性がある。

観世音菩薩は、身を三十三身に現じて、六道の衆生を救

済するのが本誓である。

「妙法蓮華経観世音菩薩普門品」

と衆生がその御名を唱えるだけで即座に観世音菩薩が救い

の手をさしのべてくださると説くとおり、——その靈験は、

難病平癒、危難災厄からの逸脱、貧者の致富、子種の授与

(申し子)、醜貌から美貌への転生等々、きわめて現世利益

的なものだった。

とりわけ、中古(平安時代)・中世(封建時代)の文芸に

93P下2~4頁 170 (清水寺)

5,442P

買え梅 5632 ↓ ↓ ↓

縦線を、目立たなくしておいて下さい。

・カウー  
・右頁上半分に、  
上方へはみ出し  
掲載下さい。

・「登廊」と入力  
しておいて下さい。

・「初瀬川」と入力  
して下さい。



← 登廊

← 初瀬川 ↓

↑ 入力して下さい。

はせでら ぼろうじ 1409 第540回 長谷寺境内図

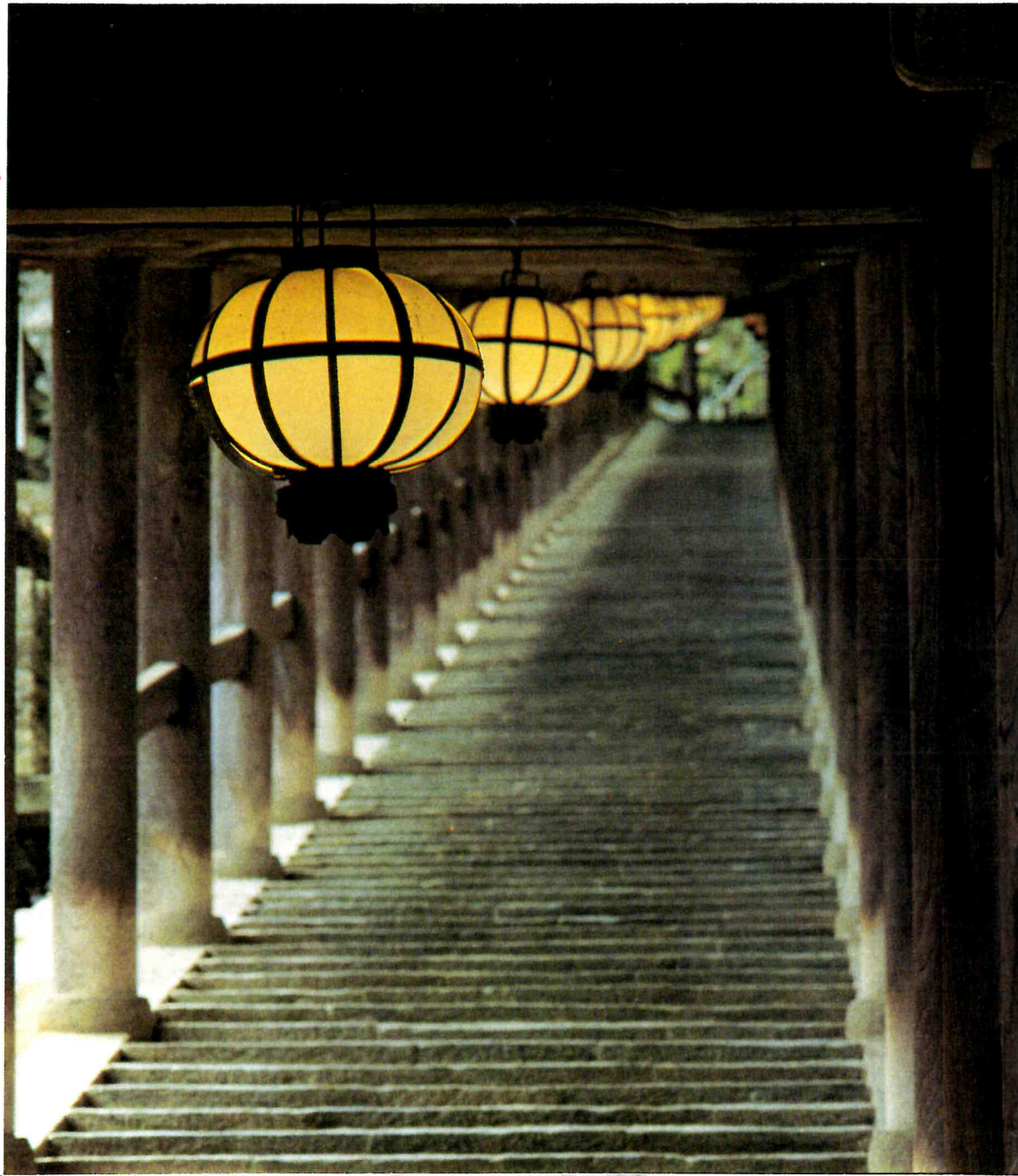
1209 1309 はせでら ぼろうじ  
「長谷寺・空生寺」古寺巡礼① JTB (2002年2月以降出版)

・登廊(重文)は、上・中・下の三廊からなり、全長約200m。399段。初夏、両脇に牡丹が咲き競う。  
100 \* 買え梅 5623 ↓ ↓ ↓

・カラー

・右頁下半分に、下方へ↑  
はみ出して大きく  
掲載下さい。

・出来子だけ、朋子く  
お願いします。



カ  
タ  
↑

長谷寺、室生寺  
田中昭三 見聞主  
地図有り。



132G

142G 写真図版 800 長谷寺の~~登廊~~<sup>はせでら</sup>の~~登廊~~<sup>のりさ</sup>登廊

『長谷寺』竹西寛子・川田聖見、淡交社、昭和55年1月20日発行、No.8 参照、101P

・カラー  
 ・左風全扉に、はみ出し  
 大主<載好

・暗く強い  
 ぶりに下地  
 明く<手履  
 1才。

5.444<sup>p</sup>

地蔵と  
 観世音と  
 林敬忠  
 582頁  
 -13  
 187  
 1974



1409

写真出版 801 長谷寺 十一面観音像 (像高10m余) 重文(木造)

1309

古色大和路 江泰吉 江泰吉記念奈良市写真美術館 平成24年10月29日  
 発行 327頁参照

おける泊瀬・清水の地は、人と人とが邂逅（めぐりあい）をする奇遇の場所として特筆されている。（小野小町攷）

小林茂美、桜楓社、一四〇頁参照）

そして、……とても信じ難いようなことではあるが、この「長谷寺」で、小町はついに、遍昭とめぐり会った事だ

理想像される。

\*

遍昭（良岑宗貞）は、仁明天皇崩御直後の嘉祥三年（八五〇）三月二十八日に出家し、石上寺、清水寺等、養ひとつをうち着て、世間世界をいろいろあるき、この齊衡二年（八五五）初夏頃には、泊瀬の御寺「長谷寺」に於て修行していたのであろう。

群書類従本『遍昭集』は、——仁明天皇の崩御後一年が過ぎて御ふくぬぐ時に、遍昭が、みな人は花の衣になりになりけり

苔のたもとよかはきだにせぬ

と歌い、そのちいづこともなく歩き侍て、「長谷寺」に至ったと述べており、このあとに、小町と遍昭の二人の贈答歌を載せている。

なお、『大和物語』は、遍昭が世間世界を行いて「長谷寺」へやってきた後に、仁明天皇の御喪（一ヶ年）

があげたと記述しているが、——わずか一年間で、世間世界を行くあるけるわけはなく、話の筋として無理があるように思われる。（『大和物語』一六八段参照）

この物語では、

遍昭は、石上寺・清水寺など世間世界を行き歩いた後に、長谷寺へやってきた

と考えてみたい。

■として予め述べると、

遍昭はこの直後の齊衡二年（八五五）五月、従兄弟にあたる右大臣藤原良房の配慮によって比叡山へ登る

ことになる。（慈覚大師伝。「小野小町攷」小林茂美、桜楓社、二二七頁参照）

齊衡二年四月当時、遍昭は比叡山へ登る日をして……俗世間をながくかしい思いで見ているのではなからうか。

慕わ

さて、「長谷寺」へやってきた小町は、何とも不思議なことには、……またもや、あのなつかしい声を耳にした。

（以下、「遍昭集」参照）

籠っている局のかたわらに經を読んでいるのは誰だろうかと思った小町が、連れの人をやって見てこさせたところ、「以前、清水寺で）衰ひとつ着ていたあの法師が、——

5.445P

すがに(優れて)いるだけのことはあって、艶やかな姿をし  
て隅の方においでになりました」

と言った。

●おそろく、世間世界を行き歩いた後に「長谷寺」へ来

た頃には、僧位も上がって、遍昭はかなり立派な衣服を着

用するようになっていたのである。(第54回 遍昭 参照)

●このところ、『遍昭集』には、

「みのひとつきるほうしのさすかにあてやかなるなむすみ

のかたにゐて侍といひければ云々」

とあるが、しかし決して、

〈蓑ひとつ着る法師が、艶やかに隅の方に居た〉

というわけではあるまい。

●この物語では、

〈清水寺で蓑ひとつ着ていた法師が、長谷寺では艶やかな

姿をして隅の方に居た〉

と解したい。

耳をたてて聴くに、その僧侶の声は、いと尊く、心に深

くしみじみと滲み透るようであった。

〈ただ人ではないわ。少将良岑宗貞様は、いづれ大徳(大

きな徳のある人)になられる(と)でしよう〉

小町は、そう思った。そして、

5.446A

苔の衣を我にかさん

いはの上にたひねをすれはいと寒し

とたのもしくなんみそひとつかし給へ

このみえらになん侍いとさむきを御こゑきこえ侍れはい

とて、

期待しております。どうか御衣(身ぞ)一つお貸し下さい」

で、このようにして筆をとっております。大麥頼もしくも

ざいましょう。少将良岑様のお声が聞えてまいりましたの

いくらいですが、しかし山の中のこと、晩になると寒うご

を聞く時はいつも寒うございました。この季節、日中は暑

「私はいま、この長谷寺に来ております。あなた様のお声

そこで小町は、

照)様に伝わらないに違いない。

ということが、——端的(手みじか)には、少将良岑(遍

ております。お話など致しとう存じます」

〈あの時、石上寺でお会あいした私小町が、この長谷寺に来

しかし、それでは、

新しく歌を作って贈ろうかとも思った。

と思索した。

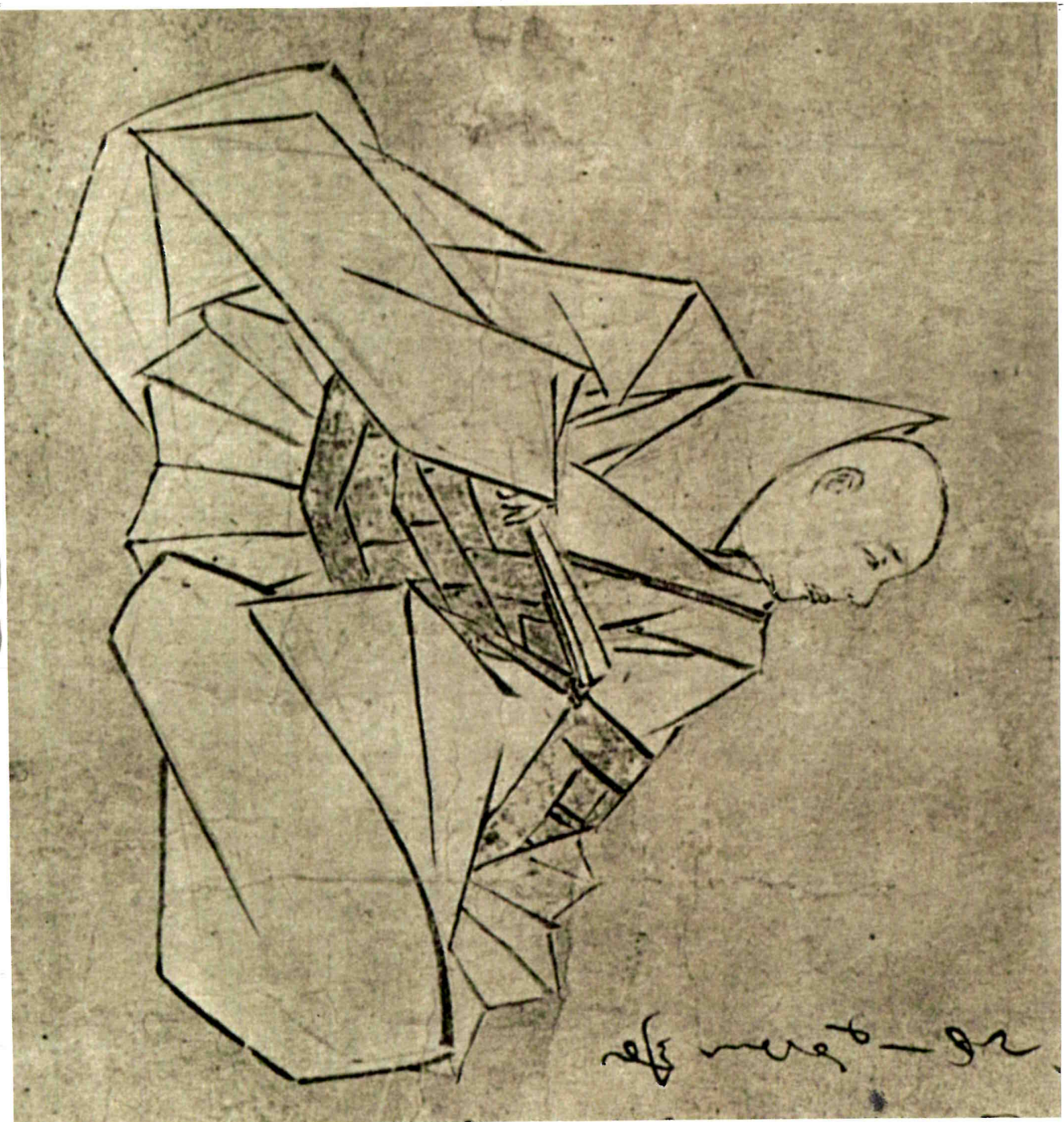
せしたいわ。どう言ったものかしら」

〈私がこの長谷寺に来ていることを、どうにかしてお知らせ



・カラーで印刷して下さい。  
 ・左頁の下半分に、大きくはみ出して掲載下さい。

105P



5.447P

105

140P 第541図 通昭 (上々 豊本三十六歌仙繪)

130P 『日本繪巻物全集』三十六歌仙繪 角川書店、昭和42年12月30日発行

43頁参照

120P 豊の上座, 人物を描いてはいるので 『上げ豊本』の名称がある) 角川書店、11頁に上々 (Age datami) とある  
 古今和歌集口絵 『日本繪巻物全集』角川書店、11頁に上々 (Age datami) とある  
 12頁の絵の下に解説がある。 ⑤5496 修正通昭

と書いて届けさせた。

すると遍昭は、いままた少し変えて、

山ふしの昔の衣は只ひとく

かさねはうとしいさふたりねむ

と書き送ってきた。

「まあ、やはり少将良岑宗貞様なのね」

喜んで小町は、

〈あんなにも親しく言葉を交わした間柄なので、ぜひ、もう一度会ってお話をしたいわ〉

と思い、胸をときめかせて訪ねていった。

やがて、艶やかな姿の僧がやってきた。

僧位の上がった遍昭は、こうした時に多少なりとも融通

がきくようになっていたのかも知れない。

四年前に、祖父篁と石上寺を訪れたこと。忘れられない

贈答歌のこと。祖父篁が死去したこと。宮中に入ったこ

と。清水寺で懐かしいお声を聞いて、「岩の上に旅寝をす

れば」の歌を差しあげたこと。返歌を頂いて嬉しかったけ

れども、お会い出来なくて大変心残りだったこと。等々、

小町は語った。

可憐な薔がふくらんで、いままさに美しい花になろうと

している風情の小町のおしやべりを、遍昭はにこにことし

5.448P

た笑顔で聞いていた。見つめる綻んだその目には、心をな

ごませる柔らかな優しさがあった。

小町は、その穏やかな微笑みにスツと引き込まれていく

ような得もいえない安らぎを感じた。そして、言葉では言

い表わせない心地よい嬉しさを覚えるのだった。

小町はさらに、宮中でいろいろな珍しい儀式のことや、

楽しかった出来事などを、おもしろげに語った。

「私、昨年十一月の新嘗祭の五節の時にね、美しい着物を

着て、皆が見ている前で舞いを舞ったのよ。初めてのことに

だったから、間違えないようにするのが精一杯で、まるで

フワフワした雲の上で踊っているような気がしたわ」

\*

初瀬川上流の観音山中腹に巍然と聳える「長谷寺」で遍

昭と小町とが再会したのは、もしかしたら、四月の上弦の

月(半月)が西の空に傾きかけていた頃のことであつたか

も知れない。

時折、雲と雲との間あたりがぼくと明るくなって、そこ

に月があるのだと知れるような、…そんな宵のことであつ

たろうか。

天空を吹き渡る風に乗って、雲が流れてゆく。

遍昭

は、宮仕えしていた時に作った舞姫の歌を思い出して

天つ風雲の通ひ路吹きとめよ

この歌は、五節のころ舞姫を見て詠んだものである。

(群書類従本「遍昭集」)

つまり、良岑宗貞は、陰曆十一月中の卯の日(新嘗祭・

大嘗祭の日)を中心として繰り広げられる五節の時に舞い

終えて退出する舞姫を、空を飛んで帰る天女に見たてて歌っ

たのだった。

なお、『遍昭集』にあるこの歌が《原形》であろうとい

う。(古今和歌集「日本古典文学全集、小学館、三三三頁、注

記参照)

〈ああ、あの時の情景が目に浮かぶ〉

懐かしい思い出が、遍昭の胸中に華やかによみがえった。

そんな記憶のなかの舞姫の姿が、——いつしか遍昭の目

には、小町の清楚な美しさと重なって見えていた。

天に近い初瀬の山に、天女のように麗しい乙女がいる。

なんとまあ優雅なことよ。

遍昭は、小町の姿を、まぶしそうに見つめていた。

心に浮かぶままに、遍昭は歌った。

5,449 P

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ

をとめの姿しばしとどめむ

(古今和歌集「卷十七十八七二」「小倉百人一首」)

天つ風よ。雲をたくさん吹きつけて、雲の中にあるとい

う通路を遮断しておくれ。そしてしばらくの間だけでも

いから、天上界へ帰ろうとする乙女の姿をここにどどめ

て、私にゆっくり見させてくれないか。

小町は、その遍昭の歌に、うっとりした。

〈何という美しい歌なのでしよう〉

天女にたとえられた小町は、さすがに嬉しかつたが、……

面映ゆくもあつた。

「いいえ、そのようなことをおっしゃってはいけません。

私、どうしていいか戸惑ってしまっし、お月様もたいそう

お困りになるわ」

頬をほんのりと赤らめながら、小町は歌った。

天つかせ雲ふきはらく

久堅の月のかくる道まどはなむ

それは、乙女の恥らいをふくんだ、好感のもてる歌だった。

「いやはや、これは参った。——それにしても久しぶりに、

心ときめくひとときを過ごしました」